



## ジョン・マーズラフ、トニー・エンジェル著 『世界一賢い鳥、カラスの科学』「はじめに」より

カラスの「贈り物」は具体的なものもあれば、象徴的なものもあり、じつにさまざまである。理解と親愛の情を示すカラスもいる。光るガラスやプラスチックの玩具、ハート型キャンディなどを人間の恩人に届けた鳥もいる。空から急降下して、見知らぬ人に「ハロー」と声をかけて驚かせたカラスもいる。生まれつき好奇心が強く、目立つ仕草をするワタリガラスが狩猟者を獲物まで案内したり、捜索隊に負傷者の居場所を気づかせたりすることもある〔カラス科カラス属の大型の鳥を英語ではレイヴンと総称し、それ以外をクロウと呼び分けているが、該当する日本語がないため、コモン・レイヴンの和名ワタリガラスを訳語に当てた〕。カササギやカケスが窓をそと叩いて毎日の餌をねだり、寒い一日を明るくしてくれることもある。

これらはみなカラス科の鳥で、ホシガラス属、カケス属、カササギ属、カラス属などが含まれる。この先の各章は、人間の暮らしと自然の活動を豊かにしてくれるカラス類のさまざまな「贈り物」を検証する。そして、因果関係を素早く的確に推測するカラス類の能力はそれ自体が自然からの贈り物、つまり天賦の才なのだと主張する。そこには生存価（生物の生存・繁殖を高める能力や特徴の特性）がある。高度な知能であることを示すこうした特性は、進化を通じてすべての鳥類が—おそらくは恐竜の祖先たちも—身につけた天賦の才なのである。

カラスと人間との密接なかかわりは、芸術、言語、伝説、それに神話にひらめきを与えてきた。カラス科の鳥は、いたずらでも遊びでも熱心さにおいても独特な巧みさを見せる。彼らはまた人間やその他の知覚のある生物に共通する行動について考えさせ、自然にたいする理解を深めさせる。

さまざまな分野や立場の人びとが、昔ペットにしていたカラスの悪ふざけについて意気揚々と語り、地元のカケスやカササギやワタリガラスがしてかした、ときに迷惑にもなる興味深い行動についてわれわれ著者に熱心に教えてくれる。本書ではこうした人びとの話を、われわれが科学論文や一般書で見つけたその他の例とともに紹介する。カラス類の珍しい例外的な行動は、それらの鳥を専門に研究する少数の人間にしか見られないわけではないからだ。

科学者のなかには市民からの報告は信頼できない、あるいは説明がつかないとして、顧みない人もいる。一般の人びとは正式な訓練を受けておらず、証拠が不足し、やたら深読みするうえに、さまざまな影響を受けているからだ。確かに、誇張だらけで事実よりも想像によって色づけされた説明にも出会ったが、それでもそうした報告を調査し、起こった出来事確かめるために観察した人びとの話を聞かざるをえなかった。一つひとつを見れば、そのような報告は逸話に過ぎないが、総合すれば科学的研究を後押しする比類のない情報を与えてくれ、さまざまな可能性の集合体となるからだ。

ジョン・マーズラフ、トニー・エンジェル著 『世界一賢い鳥、カラスの科学』 東郷えりか訳  
河出書房新社 2013年



作者不明 《鳥図》（部分）シアトル美術館